

「TOKYO2020」とは何であったか

佐々木隆

プロローグ

二〇一三年九月七日（日本時間八日）に二〇二〇年のオリンピック夏季大会の候補地、マドリード（スペイン）、イスタンブール（トルコ）、東京（日本）の中から最終的な投票で東京が選ばれた。二回目の開催はアジアでは初めてだった。

二〇一九年十二月頃より中国武漢で新型の肺炎が発生したという報道から二〇二〇年一月には武漢での蔓延、一月九日には世界保健機関（World Health Organization: WHO）に新型コロナウイルス（原文では novel (or new) coronavirus）との声明を出し、さらに二月十一日、WHOがCOVID・19と命名した。その影響はパンデミックを巻き起こし、二〇二〇年の東

京オリンピック・パラリンピックは延期となり、様々な問題を抱えながら二〇二一年に開催された。ここでは、COVID・19以外の諸問題に注目しておきたい。

一 新国立競技場の設計と建築の着手

オリンピックの開催が確定すると、次に着手しなければならぬことは各施設の準備だ。特にメインスタジアムとなる新国立競技場の建設は大きな課題となった。新国立競技場の建設までの経緯は次の通りである。

二〇一二年七月二〇日 日本スポーツ振興センター、「新国立競技場」のデザインの国際設計 競技の詳細を発表・公募を開始

二〇一二年十一月十五日 最終審査結果発表。

ザハ・ハデイド・アーキテクトのデザインが「最優秀賞」。

二〇一五年七月八日 第六回国立競技場将来構想有識者会議で、見積もりの二倍にふくらんだ総工費二五二〇億円の計画を承認、同年十月の着工が決定。

二〇一五年七月十七日 安倍首相が森会長らとの会談後、計画白紙の決断を表明。

二〇一五年十二月二十二日、大成建設・梓設計・隈研吾のチームによるA案（総整備費約一四九〇億円）に「優先交渉権者」が決定。
二〇一九年十一月三〇 国立競技場完成。

ザハ・ハデイド・アーキテクトのデザインが変更となったのはおもに費用の問題であるが、ここで考えなくてはならないことは、デザインと設計が契約上、異なっているとういことだ。設計と費用

は建築と直接結びつき責任問題も発生するが、今回の契約ではデザインは建築上の責任を負わないということだ。筆者が疑問に感じたことは次の通りだ。

一 コンペでの審査項目に費用の問題は全く入らなかったのだろうか。

二 国立競技場将来構想有識者会議での決定から十日もたたないうちに首相が白紙表明しているが、有識者会議は本当に機能していたのか。

三 費用の見積もりについて現実的なものであったかどうか。

二 エンブレム問題

オリンピックは大きな利権が絡むため、様々な

問題が出てくる。競技場だけでなく、エンブレムもまた例外ではなかった。決定までの経緯を見ておきたい。

二〇一四年九月十二日 応募要項発表。

二〇一五年七月二十四日 佐野研二郎のデザ
インに決定。「ディド (Didot)」「ボドニ

(Bodoni)」をモチーフにして、多様性(黒)
と心臓の鼓動(赤)を表現したデザイン。

二〇一五年八月十四日、リエージュ劇場とオリ
ビエ・デビーが「著作権が侵害された」とし
て、国際オリンピック委員会(IOC)に対
して、エンブレム使用の差し止め等をベルギ
ー・リエージュの民事裁判所に提訴。

二〇一五年九月一日 エンブレム、取り下げ。

二〇一五年十一月二十四日 再公募開始。

二〇一六年四月二十五日 最終審査。再公募

の結果、一四五九九点が集まり、最終候補四作品の中から野老朝雄（ところ・あさお）がデザインした組市松をモチーフにしたエンブレムに決定。

大まかな概要であるが、二〇一五年七月二十四日にエンブレムの決定を発表し、その一か月後には取り下げるという前代未聞の事態が発生した。最初のエンブレム問題は三つあろう。第一はスクリーンングである。エンブレム制作者のモラルの問題もあるが、委員会として商標登録や著作権のチェックが本当の意味で機能していたかということだ。第二は商標登録、第三に著作権の問題である。特に佐野の場合にはオリニピックのエンブレムとは別に他のデザインについて盗用等の疑義がもたれており、本人が謝罪する結果となっている。第一の問題は組織としての問題であり、第二

と第三の問題はインターネットの時代を迎えると、まったくの素人でも類似した画像などを検索し、盗用ではないかとネット上を炎上させることだ。つまり、皆正義の名の元に、ネット警察のような働きをするのだ。従って、ネットの疎いような人だけで委員会を構成すると、思わぬところ足をすくわれるところになる。審査の可視化も今の時代では求められるところだ。

三 ミライトワとソメイティ

国立競技場やエンブレムのゴタゴタにより、審査過程の可視化や明確化は、その決定に仕方についても大きな影響を残した。ではその過程を時系列で見ておきたい。

二〇一七年五月二十二日、マスコットキャラクター

ターの公募を発表。

二〇一七年十二月七日 応募総数二〇四二件から最終候補作三点を発表。

二〇一八年二月二十八日、最多得票を得た福岡県在住でデザイナー・谷口亮のデザイン(ア)案に決定。

二〇一八年七月二十二日 東京ミッドタウン日比谷でネーミング(ミライトワとソメイテイ)を発表。

公募された最終候補三点の中から小学生による決戦投票で決定された。ここでは選考過程や商標権や著作権によるいわゆる大きなゴタゴタがなかったようだが、筆者にはどうしても気になる点がある。それはマスコットが人型であるために青と白を基調にしたミライトワは男の子、ピンクと白を基調としたソメイテイは女の子というイメ

ージを持たせてしまうことだ。形状も比較的角のあるミライトワに対し、ソメイテイは丸味を帯びていることもその一因だ。これが問題となるのは、ミライトワがオリンピック、ソメイテイがパラリンピックのマスコットである点だ。エンブレムはデザインは異なるものの色合いは統一されている。キャラクターを人型にする場合には多様性を持たせる意味でも、誰がみても男性とも女性ともどちらでも受け取れメッセージ性の強いものを選ぶべきではなかっただろうか。これは最終候補作三点を選定した委員会ほどのように考えていたのかは疑問が残るところだ。

四 運営側の人事に関する諸問題

国立競技場とエンブレムも運営側の問題と捉えてよいだろう。しかし、もっと厄介な問題が二

〇二一年に勃発した。これはまさに運営側内部の問題であり、日本の信用を著しく貶めたものである。決定的であったのは不適切な発言等による四人の辞任・解任である。

第一は二〇二一年二月の組織委員会での森喜朗会長の女性蔑視発言に端を発した辞任騒動、その後の後任人事についても、不要な発言から大きな騒動となった。

第二はCOVID-19後、新たに再編成された開閉式の総合統括の佐々木宏の女性タレントの容姿を侮辱したコメントにより辞任したのが二〇二一年三月十八日である。これは正式な会議ではなく、LINEでのやりとりというかなり限定されたグループ内ものがリークされたことになる。コメント自体不適切であったことは許されないが、LINEグループのコメントが流出したことが自体もSNS時代の怖い一面を覗かせた。

第三は開会式の楽曲担当であった小山田圭吾による同級生をいじめていたことを告白した雑誌のインタビュー記事が明らかになったことだ。これにより七月十九日に辞任した。開会式四日前のことである。

最後は五輪開会式前日の七月二十二日、小林賢太郎が過去にホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）を揶揄するコントのセリフが問題視され、解任された。過去のコントの映像等がインターネット上で問題となり、辞任騒動となった。

この四つの辞任・解任は過去・現在の不適切な発言等によるものだ。本人の問題意識と世間の意識との乖離が垣間見られたと同時に、組織委員会の人事に関するスクリーニングが機能していなかったことがさらに問題を悪化させていたことになる。組織委員会のトップ自体が不適切な発言で辞任せざるを得ない組織だけに、そこで決定さ

れた人事が如何に杜撰なものであったことか。

これ以外にも二〇一九年三月には東京五輪招致に際し、不正疑惑に対して竹田恒和が辞任した経緯もあつた。その他にも人事に関するゴタゴタがあつたが、すべてをここで取り上げることにはできない。

エピソード

オリンピックでは選手側のドーピング問題が大きく取り上げてきたが、日本の組織委員会の問題が大きかったことは言うまでもないことだ。選手にはスポーツマンシップを求めているが、運営側には人事に関して利権が大きく絡むため、慎重にも慎重を期すべきである。今回の場合には、過去の発言・現在の発言や行動など、委員として以前に人としてどうなのかと言う点について、スク

リーニングが全く機能していなかったことが露見した形だ。

さらに今回はインターネット時代を反映してSNSが大きく影響していることも見逃せないものがあつた。過去の様々なデータベースが映像としてインターネット上に残されていることから、一般人も検索可能な状態になっているということだ。

TOKYO2020が「多様性」がテーマになつていることから、これに反するような言動は当然受け入れられることはできない。ましてや組織委員自身がこうした言動があればなおさらだ。組織委員長をはじめ、組織委員の中に多様性に反する行動をとつていた委員がいたことが自体がすべてを物語つているのだ。